

# クーデレ&ヤンデレ彼女と僕のお話

Kuろ歴Shi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※ノクターンで連載中の「クーデレ&ヤンデレ彼女と僕のお話」の描写を少し変えたりしたものです。

ノクターン <https://novell8.syosetu.com/n0105hd/>

とってもかわいい幼馴染とイチヤイチャ！だけど僕の彼女、クールで可愛いヤンデレでした…

いつもはクーデレだけど、ヤンデレでもあり僕を愛してくれる彼女と、そんな彼女を愛する僕の物語。

※エッチ回には♡つけます。

Twitter <https://twitter.com/Kushil6169180>

よかったら来てください。

(追加) 誰か来て… 悲しい。 閲覧者とかの数とか、活動報告あげます。来て(切実)

目次

僕らの胸の内 | 1

告白 | 3

第3話 | 6

## 僕らの胸の内

僕は有明未来月。幼馴染の葛西エレーナに対して恋心を抱いている。昔から家が隣同士で、家族ぐるみで交流があったから「エレン」「みーくん」って呼び合ったりもした。でも最近は彼女の両親がロシアへ転勤してから交流は殆どない。本当は彼女ともっと一緒にいたいのに。でもそんな夢はおそらく叶わないだろう。彼女が最近クラスのエケメン光輝君と一緒にいるからだ。エレーナは正直とってもかわいい。父がロシア人のハーフだから透き通るような白髪をしている。身体は少し背が高めでスレンダー、っていうような体型をしている。それでも貧乳ってほど胸が小さいわけでもなく、巨乳ってわけでもない。彼女はいつもはクールだけどたまに笑顔を見せる。その笑顔が普段のクールさのギャップを生み出す。こんなの並の男はイチコロだね。かく言う僕も、その笑顔が好きなんだけど。彼女、更にはテストでは常に学年一位。スポーツも万能。

それに対するお相手、光輝君も頭が良くて、学年トップレベルでサッカー部のエースときた。そしてこの学校の生徒会長もしている。最近噂で光輝くんがエレーナを狙ってる、なんてことも聞く。エレーナと光輝くんはお似合いのカップルだと思うし、そもそも僕とエリーナじゃあ釣り合わないだろうし。だから俺はできること、つまり彼女の幸せを応援したい。それに彼女が笑っているのを見るだけでも、僕は幸せだし。そんな事を考えながら、今日も一日を過ごす。

ああ、鬱陶しい。私にとっての光輝への評価だ。まるで私が好意を抱いているかのように接してくる。こいつが私を狙ってる、なんて話も聞くけれど、正直反吐が出るくらい気持ちが悪い。私が愛しているのは未来月・・・みーくんだけなのに。最近は私とは話さなくなっちゃったけど、どうしたんだらう。まさか私を嫌いになっちゃったとか？それとも変な雌豚に惑わされてるのかな？あ、またみーくんに雌豚が這い寄ってくる。自分では気付いていないけれど、みーくんはとってもカッコイイ。クラスの雌豚共がエケメンランキングなんて

ものを作っていたけど、みーくんは2位だった。一位がああ、の糞でみーくんが2位なのは納得がいかないけど、私の彼氏がカツコイイって思われてるのはなんだかい気分になる。

もしhwnな雌豚に惑わされることがあったら私から離れられないようにきちんとお仕置きしなきゃ♡でもまずはみーくんと付き合わない♡みーくん私はのこと愛してくれてるし、たくさんイチャラブセックスしよう♡早く明日にならないかなあ。みーくん待っててね…

そんな思いを胸に抱いた少女は彼に熱い視線を投げかける。その視線を受ける少年は、そんな彼女の思いに気づかず、その日を終えた。

## 告白

翌日

コンコン

僕の部屋の窓が叩かれる。今は土曜日の9時なのに、どうしたんだろう。でもこの音を聞くのはいつぶりだろう。エレーナからのお誘いの音。小学生の頃は毎日お互いに鳴らしていた。中学生になるとあまり聞かなくなったが、勉強を教え合ったりするため、月に2〜3回は鳴っていた。

この音は、「部屋に来て」という合図だ。僕と彼女の部屋はとても近い。だからこうして部屋同士を行き来できる。僕はちよっぴり期待を抱きながら彼女の部屋に向かう。

「久しぶりだね、どうしたの?」

期待を悟られないように気をつけつつ、彼女に質問する。

「いえ、大したことじゃないんだけど、」

と前置きをして続ける。

「最近私と話してくれないよね?どうしてなの?」

彼女はすこし悲しそうな、心配したような表情で問いかける。

僕は彼女の笑顔を見たいのに、彼女を心配させてしまっている。

「それに光輝君がエレーナのこと狙ってるって噂があっけさ...だから僕が近くにいるとエレーナの邪魔かなって思ってる。」

彼女の顔に、悲しみと怒りの色が浮かぶ。僕は彼女を怒らせてしまったらしい。

「馬鹿ですか...?」

そう彼女は罵ってくる。

「あなたが私の思いを勝手に決めつけないでください。私が光輝を好き？冗談じゃない、なんであんな糞を好きにならなきゃいけないんですか？」

「私は… 私が愛しているのはあなた… いや。」

「私はっ、みーくんのことを愛してるのに！」

エレーナが僕のことを好き？どういうことだ？僕が驚きを隠せずにワタワタしていると、

「ははあくん。そうか… 他の女のことになったんじゃないですか？誰なの？ねえ教えてよ。今からそいつぶっ殺してくるからさあ… 教えてよみーくん。」

彼女の目からハイライトが消える。彼女はクーデレ属性の他にヤンデレ属性を持っているらしい。でもそんなことより、彼女が僕を愛していると行ってくれた。彼女に僕の想いをぶつける。

「エレーナ。僕は他の女の子なんて愛してないよ。僕はずっと、君に恋をしているんだ。君より可愛い子なんてこの地球をどんなに探してもいないよ。それに君は僕のことを愛しているって言うてくれたよね。」

そのまま僕は、

「僕はエレーナを愛が好きだ。だから僕と付き合っしてほしい。」

対するエレーナは…

「みーくんが私を好きだなんて当たり前前のことを言わないでくださいよ。やっと恋人になる勇気を出してくれたんですね。」

うん。なんかちよっとおかしいけど、エレーナはオツケーっただよね。エレーナが僕の彼女。そう思うだけで笑みがこぼれてしま

僕たちのお話はここからが始まり。

ここから、「クーデレ&ヤンデレ彼女と僕のお話」が始まる。



### 第3話

前話までのあらすじ

僕とエレーナが付き合うことになった。エレーナはヤンデレだった。

エレーナが僕の彼女。そう思うだけで体中の細胞が歓喜する。エレーナが愛しい。彼女の白髪がとても愛おしく感じる。彼女の髪をなでたい。彼女の頭を僕の足の上に乗つける。いわゆる膝枕だ。

彼女の髪は透き通るようにきれいで、サラサラだ。彼女の頭をなで、髪を梳く。彼女は気持ちよさそうに僕に頭をこすりけてくる。かわい。まるで小動物みたい。時折、「んっっ♡」っ気持ちよさそうに鳴く。

彼女は気付いているだろうか。顔を擦り付けるたびに、彼女の小ぶりで可愛い鼻が僕のおちんちんをかすっていることに。だめだ、鎮まれ。そう念じても無理だった。僕のズボンがおちんちんで押し上げられ、彼女の目の前に山を突きつける。

「ご、ごめん」

彼女は何も反応せず、「うふふっ♡」と言いながら僕のおちんちんの匂いを嗅ぐ。こんなのまるで拷問だ。

ツンツンと鼻先があたっている。これはマジで辛い。

「エレーナ。匂いを嗅ぐならせめてズボンは脱がせて。」

エレーナの目が、「その言葉を待っていた」と言わんばかりに輝く。彼女は僕を立たせるとおちんちんが目の前に来るようにひざまずくと、口で焦らすように、ズボンのチャックを下げる。そしてボタンも外し、ストンとズボンを落とす。僕のおちんちん山のとっぺんは、先走り汁で湿っていた、というかぐちゃぐちゃだった。彼女はそのとっぺんに鼻を押し付けてスンスンと匂いを嗅ぐ。一通り嗅ぎ終わったのか、鼻を離すと、

「えいっ♡」っという掛け声とともにパンツを下げた。ボロンツと出

てきたおちんちんが彼女の整った顔を叩く。ここまでされるとは思っていなかったけど、刺激されたおちんちんが辛いのも事実。恥ずかしさを押し殺す。

「はあっ♡ミークンのおちんぽだあ♡とってもおつきくて臭くって可愛い♡ちゅっ♡」

彼女の唇がおちんちにキスをする。それを見て、僕はエレーナにキスをしたくなる。彼女を抱え、ベッドに運び押し倒す。そして一気に唇を奪う。初めてのキスなのに、彼女の口をこじ開け舌を入れる。二人で舌を絡ませ合う。

「んんっ♡ちゅっ♡んっ♡ジュルっ♡」

二人の吐息と舌を絡め合う下品な音だけがこの場を支配する。甘い。お互いの唾液を交換し合うようなキス。

「んっ♡ぷはあ〜♡」

唇を離すと銀色の糸が二人の間にできた。

自然と彼女の服に手が伸び、彼女を下着姿にする。パンツには愛液で大きなシミができていた。

彼女の胸は控えめながら、はつきりと主張はしている。

ブラをずらし、彼女の小ぶりの胸を露出させる。肌と同じように薄めの色をした乳首は、もうぷっくりと勃起している。彼女の乳首にしゃぶりつく。

「はあっ♡そんっなに吸っても、おっぱいはあ、出ないんですよっ♡まるでっ、赤ちやんっ、みたい、ですっ」

彼女の胸はとても反応がいい。彼女の小さい乳首を舌の上でコロコロ転がし愛撫する。左手は彼女の左胸を優しく、マッサージするように揉む。柔らかい。彼女の胸は小ぶりだけど、それでも僕にしつかりと優しさを伝えてくる。

「はうっ♡もうっ♡ゆっくりのほうが手つきがいやらしいですっ」  
「じゃあ強くするね」

口に含んでいた乳首をデコピンして弾く。

「はうっ！」

プシャア、と彼女のオマンコから潮が迸る。そんなことお構いなしに、彼女の乳首を少し強めにつまむ。ほんとにそれだけでイク人っているんだなあ。

「ひあっ♡ふえっ♡ふああ〜♡」

また彼女がイク。

彼女のパンツは濡れていないところがないくらいにびしょびしょだ。そろそろ脱いでもらおう。

スルスルと左手で彼女のパンツを脱がす。

彼女のオマンコは、きれいだった。そこらへんのAV女優とは違う、きれいな筋マンコ。陰毛は一切生えておらず、彼女のオマンコの美しさを際立てている。そのオマンコは濡れに濡れている。おちんちんを入れたら入っちゃいそうだ。これは、どうしよう。触ったほうが良いのか、それとも挿れたほうが良いのか。僕が考えていると…

「えいっ」

彼女にごろりと転がされ、上下の関係が反転する。彼女は僕にまたがると、オマンコでおちんちんをしごき始める。スマタってやつだろうか。愛液が潤滑液となり、ヌルヌルとお互いの性器が擦れ合う。

もうイキそうだ。膣内じゃないけど、僕の精液が彼女のオマンコにかかるのはまずい。

イク寸前、必死で腰を引き、オマンコから逃げる。行き場を失った精子が行くのは上、つまり彼女の顔だ。僕の精液が彼女の顔を白く染め上げる。彼女の顔は精液まみれ。それはそれで征服感があるけ

ど……。なんか汚いよな……。それに彼女のベッドは愛液と汗と精液でベトベトだ。この上でこれ以上エッチするのも気が引ける。

「お風呂行こっか」

「はいっ♡」

とりあえず続きはお風呂でしよう。

いまお風呂。

エッチはしたいけど初めてがお風呂ってのも……。でもベッドもベトベトだし……。

そんなことを相談していると……

「じゃあみーくんの部屋のベッドにしたらどうですか？タオルを引けば汚れないと思いますし……」

そうだな。そうしよう。

お互いササッとシャワーでいろいろなものを流し、タオルを持って僕の部屋へ。

タオルを敷き、その上に彼女を寝かせる。

彼女の濡れている膣穴におちんちんを当てる。

ゆっくりと膣内に侵入する。膣内はきついけど、愛液で濡れているためか、しつかりおちんちんを入れることができた。亀頭がすっぽりと入ったぐらいのところまで、アレが行く手を阻む。

「直前ですが、ちよつと怖いものですね……」

僕は彼女を安心させるような、唇を合わせるだけの優しいキスをする。

「痛かったら言ってね」

「じゃあ……。さっきのキスをしたまままでお願いします……」

ニユチュツと彼女の膜を破り、そのまま根本まで膣内に突き立てる。

「思ったより……。痛くないです……。なんだか満たされている、そんな感

じです…」

唇を重ね、ゆつくりと腰を動かす。膣内の入り口で、亀頭をこすりつけるように動く。

「もっとお…奥に…」

おちんちんを奥まで入れると、何かに当たる。

「はうっ♡そこ…もっとおねがいますう…」

おそらく子宮の入り口だろう。つんつんと突つつくように刺激する。彼女がビクビクと震え、膣内が収縮する。